

シンポジウム②

～誰もが幸せになる農福連携ケアシステム～ 安芸地域の農福連携の歩み

高知県安芸福祉保健所健康障害課

公文 一也



【目的】 高知県安芸地域では、自殺対策を多職種多機関で取り組んできた。その取り組みの経過で、一人の発達特性がある、10年ひきこもりで生活困窮者の（以下 A 氏）と出会い農福連携が始まった。就労支援である農福連携は、一機関で担える物では無く多職種多機関が連携して初めて行えるものである。本稿では、農福連携を生きづらさを抱えた方達の就労支援をテーマとして、関係者らと協働し、農福連携を拡大した取り組みについて報告する。

【方法】 平成 26 年 5 月に、安芸市福祉事務所の保健師から生活に困窮した発達に特性のある 10 年ひきこもりの方 A 氏への同行訪問の相談があった。訪問時、私の目に止まったのは、A 氏宅にあった手入れが行き届いた素晴らしい畑と石ころの山だった。その頃、演者の知人であるナス農家は、ハウスの拡大をするために借りた畑が石ころだらけで困っており、A 氏を知人に紹介し石ころ拾いが始まった。A 氏は、休むことなく真面目に働きハウスが建設された。その後は、そのハウスで農家就労することとなった。このことがきっかけで、他の農家や関係機関から就労に対する相談が増え、一人、また一人と生きづらさを抱えた方達がハウス等に就労することになった。

【倫理的配慮】 事業実施するにあたり、支援対象者に支援の同意を確認して対応する事とした。

【結果】 安芸市では、JA を含む関係機関が連携して自立支援協議会の就労支援専門部会が設立された。また、農福連携や生きづらさや障害の理解を地域に広げていく安芸市農福連携研究会が設立され、支援と理解の両輪で就労支援が進むようになった。現在、103 人の障害者や生きづらさを抱えた方が、28 カ所のナス農家や JA 出荷場、酪農、すじ青海苔の養殖場等で働き定着している。長い方では 8 年目を迎えている。

【考察】 生きづらさを抱えた方達は、働くことで必要とされ社会的役割を担い、定着することでハウスが居場所となった。農福連携は、労働力不足の解消ではなく、農家の作業が生きづらさを抱えた方達の特性に合い、気付いた時に戦力となり、副産物的に労働力不足の解消になった。さらに、官民組織が連携することで、各機関が安心して生きづらさを抱えた方達を就労につなげていったと考える。今後も、誰もがしあわせになる農福連携ケアシステムをとおして安心して暮らせるまち作りを目指して行きたい。

【略歴】

平成 9 年	医療法人みずき会 芸西病院
平成10年	高知県幡多福祉保健所
平成24年	高知県安芸福祉保健所
現在	主幹 公文一也